

# 第 1 章 アジア美術館の現状と課題

## (1) 概要

名称	福岡アジア美術館
設置者	福岡市長
所在	福岡市博多区下川端町3番1号(博多リバレイン)

参考資料：「アジア美術館の概要」「計画策定のこれまでの経緯」

## (2) 基本理念

当館では、現在、以下の4つの基本理念を掲げています。(2004(平成16)年に更新)

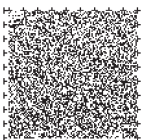
### 福岡アジア美術館の基本理念

#### ①アジアとの交流拠点、福岡

福岡市は、古代からアジア文化の受容窓口であったという地理的、歴史的な特質をふまえて、長年にわたり、アジアの交流拠点都市としての役割を歴史的に果たしてきました。福岡アジア美術館は、その福岡市のアジアとの交流への先進的な取組みのひとつとして1999年に誕生しました。以降も次のような活動によって、日本をはじめ、アジア、世界からの注目を集めています。

#### ②世界に唯一、アジアの近現代美術の専門館

福岡アジア美術館は、アジアの近現代の美術作品を系統的に収集し展示する世界に唯一の美術館です。それらの作品は、西洋美術の模倣でもなく、伝統の繰り返しでもない、変化しつづけるアジアの「いま」を生きる美術作家が切実なメッセージをこめて作り出した、既製の「美術」の枠をこえていくものです。広範で質の高いアジアの近現代美術作品の展示は、世界のどの美術館とも異なる独自性と魅力を持っています。



### ③創造・発信する交流の場

福岡アジア美術館は、アジアの美術作家や研究者を招へいし、滞在制作やアジア美術の研究など様々な美術交流を通して、人々がアジアの美術・文化に親しむ場として機能してきました。福岡・日本とアジアが、また市民と美術にたずさわる人々が、たんに出会うだけではなく、互いに理解し、共に創造し発信していくことを目指す交流型の美術館です。

### ④「まち」の中のライブな美術館

福岡アジア美術館は、福岡と博多の「まち」のエネルギーがうずまく都心にあります。この「まち」に生きる人々が、アジア美術を通してアジアの「いま」へ最短距離でアクセスできる都心型の美術館です。また、アジアの美術作家たちも、「まち」特有の場所や表現方法を活かして、「まち」を生きる人々へとアプローチしていきます。

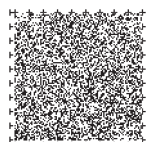
## (3) これまでの活動

まず収集については、収集方針<sup>※</sup>に従い、優れた芸術性と独自性をもつ、パキスタン以東、モンゴル以南、インドネシア以北以西のアジア23か国・地域(日本、中国、台湾、韓国、北朝鮮、モンゴル、インドネシア、カンボジア、シンガポール、タイ、フィリピン、ブルネイ、ベトナム、マレーシア、ミャンマー、ラオス、インド、スリランカ、ネパール、パキスタン、バングラデシュ、ブータン、モルディブ)の近代以降の絵画、彫刻、版画、写真、映像など多様な作品を収集してきました。

### ※参考 作品の収集方針

福岡アジア美術館では、アジア美術の独自性を示す優れた作品を、近代と現代を中心に系統的に収集するとともに、西洋近代の価値観でつくられた従来の「美術」の枠にとらわれない、アジア美術の独自性や固有の美意識を示す作品を収集し、新たなアジア美術の価値の創造を目指し、下記のような収集方針を設けています。

- 1 アジア美術の近代から現代へ至る流れを系統的に示す作品
- 2 アジアの近現代美術を考える上で重要な、民俗芸術や民族芸術、大衆芸術
- 3 その他、アジアの近現代美術を考える上で重要な、伝統的な美術・工芸



次に、展示については、アジアの近現代美術作品を系統的に紹介する所蔵品展、様々な時代・地域・ジャンルのアジア美術の魅力を紹介する小企画展、アジア近現代美術を中心に、アジアと関連のある幅広い分野の特別企画展等を開催してきました。

また、国際的に注目を集めるアジアの現代美術の最新動向を紹介するため、1999(平成11)年から2014(平成26)年まで、5回にわたって福岡アジア美術トリエンナーレを開催しました。

教育普及については、ワークショップや講演会などの教育プログラム、ボランティアスタッフによる作品解説、アジアの絵本と紙芝居の読み聞かせなどを通じて、アジアの美術や文化に理解を深める機会を設けています。広報誌「あじびニュース」やホームページ等で、アジア美術の情報を発信しています。

調査研究については、現地調査やそこで収集した貴重な資料を用いて、アジア各国の近現代美術に関する研究を進め、その成果を展覧会や講演会などの形で発表し、アジア美術関係機関・関係者とのネットワークを構築しています。

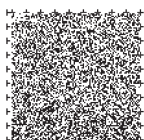
さらに、交流型の美術館として、アジアからアーティスト<sup>※</sup>や研究者を招へいし、作品制作やワークショップ、パフォーマンス、講演会などの活動を通して、地域の人々との美術交流を実施しています。

※アーティスト・イン・レジデンス<sup>1</sup>事業は、2022(令和4)年より、アジア以外の海外、国内のアーティストも対象に含め、Artist Cafe Fukuoka(福岡市中央区舞鶴)で実施

#### (4) これまでのアジア美術館の活動における強みと弱み

これまでのアジア美術館の活動における強みと弱み(現状と課題)を下記のとおり整理しました。今回の魅力向上への取組みを契機に、これらの強みをさらに伸ばし、弱みを克服していく必要があります。

<sup>1</sup> アーティスト・イン・レジデンス : アーティストが一定期間ある土地に滞在し、作品制作等のアーティスト活動を行うことをいいます。

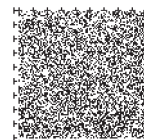


## これまでの活動における強みと弱み（数字は2024(令和6)年度時点）

活動	強み	弱み
展示	<ul style="list-style-type: none"> <li>所蔵品展：年平均9回</li> <li>小企画展：年平均1回</li> <li>特別企画展：年平均2～3回</li> </ul> 5回の福岡アジア美術トリエンナーレ開催(1999/2002/2005/2009/2014) ・2024年より バーチャル・ミュージアム <sup>2</sup> 開設	<ul style="list-style-type: none"> <li>2014(平成26)年以降、最新のアジア現代美術を紹介する大規模国際展を行っていない</li> <li>アジア美術は、文化的な背景などの知識も踏まえなければ、価値や魅力を感じる事が難しい作品が多く、それらを市民に十分に届け切れていない</li> </ul>
教育普及	<ul style="list-style-type: none"> <li>スクールプログラム 年64回</li> <li>令和6年度から市内小学校向け対話型鑑賞プログラムを実施</li> <li>アジアの絵本と紙芝居の読み聞かせ 年108回</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>展示と連動した作品鑑賞のためのプログラムが不足している</li> <li>障がいのある方や高齢者向けのプログラムがない</li> </ul>
調査研究	<ul style="list-style-type: none"> <li>現地調査で得た記録写真、資料、図書（約6万点）、情報の蓄積</li> <li>アジア美術資料室<sup>3</sup>ウェブサイトでの情報発信（年表、文献、用語等）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>2014(平成26)年以降、広範な現地調査が行えておらず、情報の更新や研究を深めることができていない</li> </ul>
作品収集	<ul style="list-style-type: none"> <li>コレクション 約5,700点(近代～現代、大衆美術、民俗美術含む)</li> <li>他館での「アジ美コレクション展」累積8回</li> </ul> →他館にはない、現代美術だけでなく、近代美術や大衆美術、民俗美術を含んだ幅広いコレクション	<ul style="list-style-type: none"> <li>近年、十分な作品購入ができておらず、最新の現代美術作品の収集ができていない</li> </ul>
美術交流 (レジデンス)	<ul style="list-style-type: none"> <li>開館以来、アーティスト122人、研究者27人</li> <li>アーティストによる館内外でのワークショップ 年平均11回</li> <li>アーティストは滞在最後に成果展実施</li> </ul> →開館当初より交流事業を進め、その実績は他館でも類を見ない	<ul style="list-style-type: none"> <li>2018(平成30)年以降、研究者を招へいしておらず、研究分野での交流が行えていない</li> </ul>

<sup>2</sup> バーチャル・ミュージアム：ネットワーク上の仮想空間に作られた博物館や美術館をいいます。アジア美術館では、コレクション展の展示空間を3Dカメラで撮影し、その記録を「バーチャル・ミュージアム」としてウェブサイト上で公開しています。

<sup>3</sup> アジア美術資料室：アジア近現代美術の理解を深めるための手引きとなる学び(ラーニング)の場として、福岡アジア美術館が蓄積してきた記録・情報・ネットワークを生かして制作・運営しているウェブサイトがあります。



## (5) 施設の課題

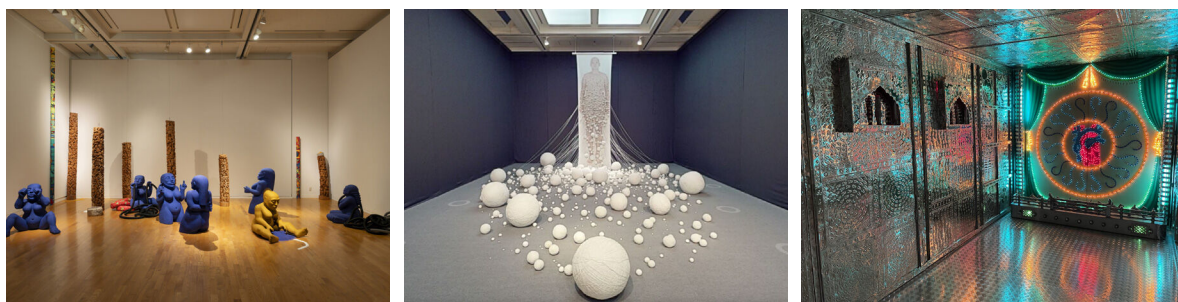
当館の施設は、下記のような課題を有しています。

### ①設備の老朽化

展示壁、天井、設備等は開館当初(約25年前)のもので構成されており、老朽化が目立つ状況にあります。老朽化により館内の機能が低下しており、来館者にとって館内の雰囲気や体験の質が損なわれ、施設全体としての魅力が低下しています。

### ② 展示スペース不足

コレクションを十分に活用した魅力的な展示を行うには展示スペースが手狭になっています。インスタレーション<sup>4</sup>や立体などの大型作品や、映像作品の増加に伴い、より広い展示面積が必要とされており、展示方法の多様化も進む中で、作品の魅力を引き出すための空間的余裕が求められています。



作品の大型化

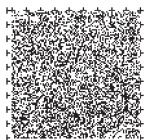
### ③ 収蔵スペース不足

収蔵スペースもコレクションの増加に伴い不足しており、適切な保存・管理が困難となっています。開館当初は約1,000点であった作品数は2025(令和7)年には約5,700点へと5倍以上に増加しており、特に大型の彫刻作品や映像作品の増加が顕著であり、今後もさらなる対応が求められる状況にあります。

※作品点数の推移：1999(平成11)年 約1,000点 → 2025(令和7)年 約5,700点

※主な作品の増加状況：絵画 約700点→約1,400点 彫刻 約80点→約230点 映像 3点→約90点

<sup>4</sup> インスタレーション：ある特定の空間にオブジェや装置等をおいて、空間全体を作品とする美術表現をいいます。



#### ④ 市民や観光客にとって、気軽に立ち寄る場所と認識されていない

現在のアジア美術館は、複合ビルの上層階に位置しており、立地は便利ではあるものの、「何かのついでに立ち寄る場所」とは言い難く、市民や観光客にとって、「わざわざ行かなければならない場所」という印象が強く、気軽な気持ちで日常的に訪れる施設とは認識されていません。その要因として、作品鑑賞以外の来館動機につながる過ごし方や価値の提供が不足していることが挙げられ、アジア美術との出会いの機会を作るため、にぎわい・集客を生み出す機能の充実が必要です。

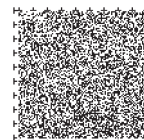
#### (6) 当館を取り巻く情勢

当館の開館以降も、アジア諸国は著しい経済成長を続け、アートにおいても目覚ましい成長を遂げています。それにより、アジア美術への注目度は高まり、アジア諸国のアーティストやキュレーター<sup>5</sup>が国際的な芸術祭や展覧会で活躍する場面も増え、アジア美術の市場価値も高騰しています。

国内やアジア圏内でも、美術館の社会的なニーズに的確に対応し、展示だけでなく、教育普及プログラムを充実させて、地域とつながることで存在感を示し、また広報・マーケティングを重視し、専門部署をおいて戦略的に行うことで、集客的にも成功をおさめている館が増えており、当館も、これらの取組みを参考に、重要な要素を取り入れていく必要があります。

一方で、当館が収集する、現代美術にはおさまらない大衆美術や民俗美術、また近代美術を含めた幅広いコレクションや継続的なレジデンスは、他の先進的な取組みを行う館でも実施されていない、当館の独自性を示す要素です。今後も強みとして活かしていくことが重要です。

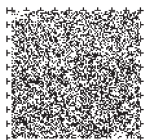
<sup>5</sup> キュレーター：展覧会やアートプロジェクト等で、企画、構成、アーティストや作品の選定を担う専門職をいいます。



## (7) 施設の拡充について

施設の課題解決に向け、展示機能や集客・にぎわい機能等を拡充し、魅力向上を図るためには、現在の博多リバレイン7階・8階の限られたスペースの再編成は困難であり、施設拡充を行う必要があると結論づけました。拡充先については、公有地を優先に、床面積規模を約7,500～9,000㎡程度、展示室の天井高さを約4～5mと想定し、それらが確保できること、都心部に位置する土地であることを前提条件として、複数の土地で評価比較をした結果、地上の公園を活かした象徴的な施設展開、周辺施設と連携した活動の展開が期待できることなどから、「警固公園地下」としました。

参考資料：「拡充先の選定について」



このマークは目の不自由な方などが使う音声コードです

